

岡山県・私立倉敷高校

## スクール・ミッションに基づく学校改革

「倉敷クエスト」による組織・教育改革で、  
地域に貢献できる主体的な生徒の育成を目指す



### 学校概要

- ◎設立 1960 (昭和35) 年
- ◎形態 全日制／普通科・商業科／共学
- ◎生徒数 1学年約350人
- ◎2021年度入試合格実績(現役のみ) 国公立校は、岡山大、徳島大、香川大、下関市立大、高知工大などに9人が合格。私立校は、中央大、京都産業大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南大、松山大などに延べ167人が合格。

### 変革の背景

目指すべき生徒像・学校像を打ち出し、  
地域の信頼に応えていく

岡山県倉敷市の東部に位置する私立倉敷高校は、女子校からの共学化、普通科の設置、福祉や情報処理などのコース増設など、地域のニーズに応えながら歴史を重ねてきた。そうした中、十数年前、大きな課題に直面した。清水俊和先生は、当時を次のように振り返る。

「本校は、多様な学力層の生徒を迎え入れ、学力をしっかりと育んで社会に送り出すことで、地域の信頼を得てきました。その信頼に応えようと、学校としてさらに飛躍するべく、7

年前、難関大学への進学指導にも力を入れ始めたのです。しかし、他の進学校との違いをうまく打ち出せず、入学者数は低迷しました。以前は本校を受験していた層も離れていき、全校生徒数は500人程度まで減少しました」

その後、ICT教育の導入や生徒指導の徹底、資格・検定試験対策の強化、国公立大学への進学指導などを次々に推進。校舎の建て替えなど、学習環境も整備した。それらの改革が実り、数年間で全校生徒数は1000人台に回復した。

次の一手として2019年度に始めたのが、学校改革「倉敷クエスト」だ。アドミッション事業部長の井上茂彦先生は、次のように語る。

「どのような生徒を育てたいのか、そのた

めに学校はどうあるべきかといった目標が定まっていなかったことが、過去の低迷の要因でもあったと思っています。そこで、学校が目指す姿を明確にし、『倉敷クエスト』を推進していききました」

### 変革の一手

事業部制を導入し、  
教師自身が学科・コースの特色を追究

「倉敷クエスト」は、18年度に赴任した守安大樹専務理事が打ち出した学校改革の総称だ。「よい教師は、生徒や保護者だけでなく、地域も変えることができる」という守安専務

図1 「倉敷クエスト」での主な改革

◎事業部制の導入

学科・コース別に3つの事業部を設置し、教育活動の決定権を持たせる。

普通科 特進事業部	特進国大(S)コース
	特進アドバンス(A)コース
	進学チャレンジコース
普通科 総合事業部	総合探究コース
	・進学・グローバル系
	・こども保育系
	・アート・デザイン系
	・医療・福祉系
・調理・パティシエ系	
・IT・プログラミング系	
商業事業部	ビジネス探究コース
	ビジネス創造コース

◎担任グループ制の導入

クラス担任を固定せず、事業部に所属する教師が輪番で、事業部内のクラスのホームルームを担当。生徒は希望する教師と二者・三者面談ができる。

◎全学科で資格・検定試験の受験を支援

全学科の生徒を対象に、放課後や土曜日に資格・検定試験の対策講座を実施。

◎定期考査を廃止し、モジュールテストを導入

定期考査を廃止し、各教科が設定した単元ごとにモジュールテストを実施し、学習評価の材料にする。

◎県内の12大学・短期大学と連携

大学・短期大学と連携した探究学習を実施。単位互換制度や、入学金が免除となる指定校制の学校推薦型選抜の制度を設ける。

※学校資料を基に編集部で作成。

理事の信念の下、「生徒が学ぶ楽しさ、主体的な活動から得る自己肯定感、何事もやり遂げる体験を重視した教育活動により、生徒と教師がともに成長し、さらに地域の発展にも

貢献する」ことをスクール・ミッションに掲げて、19年度から改革をスタートさせた。

改革の基盤は、組織改革だ。「普通科特進コース」「普通科総合探究コース」「商業科」の独自性を、それぞれの科の教師が主体的に打ち出せるよう、独立した事業部に位置づけた(図1)。全校で推進する取り組みもあるが、基本的には、各科・各コースの教育内容やテストの実施時期、修学旅行などの学校行事の内容や実施時期などを、事業部ごとに検討・実施できるよう、各事業部に決定権を持たせた。商業事業部長の高山五月先生は、次のように述べる。

「学校行事などはかつて、生徒数の多い普通科に日程や内容を合わせることが多く、学科やコースの独自性を発揮しにくい部分がありました。各事業部に決定権があることで、例えば、資格・検定試験の日を考慮して学校行事の日程を設定することができるようになりました。教育活動を柔軟に組めるようになり、学科・コースの特色を出しやすくなりました」

22年度の各学科・各コースの年間計画は、事業部ごとに策定。将来的には、事業部長に教頭並みの権限を持たせて、入学式・卒業式以外の学校行事は事業部ごとに行い、生徒募集や予算編成などでも権限委譲することを検討している。

全学科で定期考査を廃止し、モジュールテストを導入

全校共通の改革も、次々と実行した。

まず、固定担任制を廃止し、事業部内の教師がチームを組み、輪番で各クラスのホームルームを担当する「担任グループ制」を導入。そうすることで、複数の教師の目で生徒を見取れるようにした。二者面談・三者面談などの際は、生徒が、自身の成長のためには、どの教師からのアドバイスが必要かを考え、面談相手の教師を指名できるようにし、生徒一人ひとりに合った指導をする体制を実現した。

商業科中心だった資格・検定試験の受験支援も、学校全体で取り組む。放課後や土曜日に、全校生徒対象の各種資格・検定試験の対策講座を開講。普通科の生徒も、学校推薦型選抜や総合型選抜に備えられる体制とした。

最も大きな改革は、単元ごとに学習内容の到達度を確認するユニット・モジュール(以下、U&M)の導入だ。普通科・商業科ともに、年5回行っていた定期考査を廃止し、各教科・科目が設定するU&M単元ごとにモジュールテストを実施し、学習評価の材料としている。教科・科目ごとに年間授業計画を作成し、各学期で学ぶ単元、取り扱う内容、習得目標、評価規準、例題などを明記し、学校内外に公

図2 2020年度 商業科 1学年「数学I」授業計画(抜粋)

学期	単元		取扱内容	時数	総時数	内容 例題	習得目標		
	内容	題材					I (概ね評定3)	II (概ね評定4)	III (概ね評定5)
2 学期	第1章 数と式 第2章 集合と命題	第1節 数と式 第2節 一次不等式	1 因数分解 ・第1学期の復習(課題テスト) ・たすきがけによる因数分解 ・いろいろな因数分解	3	3	内容 ・因数分解の基本 ①中学校レベルの内容 ②公式の理解 →意味の理解と基本的な計算ができる	・基礎力の確認 ①高校レベルの内容 ②やや難しい因数分解 →意味の理解と計算ができる	・発展内容とその応用 →派生的な内容の理解、入試レベル。	
						例題 (1) $2xy-2y$ を因数分解しなさい。(中学校レベル) (2) 因数分解の公式を書きなさい。(P21-23の公式)	(1) 置き換えの工夫の問題 P24・練22 (2) 項の組み合わせの工夫 P24・練23	(1) 1つの文字に着目して解く問題 P25・練24、25 (2) センター試験 基本レベル(別途問題準備)	
			2 実数 ・実数の種類	3	6	内容 ・実数の意味の理解 ①自然数と整数 ②有理数	・実数と数直線の理解 ①実数のすべての区別ができる	・発展内容とその応用・平方根の計算	

※学校資料を基に編集部で作成。

開している(図2)。普通科特進事業部長の古市展久先生は、次のように述べる。

「U&Mでは、生徒一人ひとりの到達度をこまめに確認するので、つまづきを早期に見出し、対応できるようにしました。また、習熟度別クラスも柔軟に編成しています。さらに、授業計画を公表することで、教科を超えた情報共有と相互理解が進んでいます。各教科の進度や到達度を見ながら、『今の進度で、次の模擬試験に間に合うのか』『この科目の到達度を上げるために、補習をした方がよいのではないか』などと、教科を超えて踏み込んだ話をし、それが授業改善につながっています」

### 短期スパンのモジュールテストが 生徒の学習意欲を高める

U&Mでは、直前の単元で学習した内容がテストの出題範囲となるので、生徒は学習がしやすくなった。中学校時代は、定期考査に向けてどこから学習すればよいのか分からなかったという生徒が、モジュールテストで少しでも高得点を取りたいと学習に励んだ結果、学力が上がった。

「学習が苦手だった生徒が、主体的に学習をするようになったのは大きな一歩です。テストの点数が上がることで、やればできるという自己肯定感につながり、学び続ける意欲



アドミツシヨン事業部長  
井上茂彦 いのうえ・しげひこ  
教職歴14年。同校に赴任して6年目。英語科。



普通科特進事業部長  
古市展久 ふるいち・のりひさ  
教職歴16年。同校に赴任して3年目。英語科。



普通科総合事業部長  
浅井克憲 あさい・かつのり  
教職歴20年。同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科。



商業事業部長  
高山五月 たかやま・さつき  
教職歴36年。同校に赴任して28年目。商業科。



高大接続担当  
清水俊和 しみず・としかず  
教職歴24年。同校に赴任して24年目。理科。

を生んでいます」(高山先生)  
運営上の課題は、作問の効率化だ。教科によつては、年間のテスト回数が20〜30回になる上、テストは授業中に行うため、複数のクラスを受け持つ教師は、テストが生徒間で広まることを想定して、同じ単元のテストを複数パターン作成する必要がある。作問の負担軽減を図るため、事業部制の利点を生かし、科やコー

スごとにテスト週間を設けることを検討中だ。モジュールテストに対する教師の意識の差も課題だと、普通科総合事業部長の浅井克憲先生は語る。

「U&Mは、家庭学習時間の増加や学習習慣の定着につながることも目的の1つです。しかし、定期考査を行っていた時のように、授業中にプリントを配布してテスト対策をする教師もいます。U&Mとモジュールテストの目的をいま一度共有することで、意識の差を解消したいと考えています」

### 県内の12大学・短期大学と連携し、「高大接続3+4」を推進

「高大接続3+4」（高校3年間+大学4年間）をスローガンに、大学との学びの連続性を担保する仕組みづくりも進めている。既に、県内の12大学・短期大学と連携し、単位互換制度や、入学金が免除となる指定校制の学校推薦型選抜の制度を設けた。

普通科の総合探究コースでは、連携する大学・短期大学の協力の下、1・2年次に「IQゼミ」を実施している。1年次は、連携先の大学・短期大学の大学説明会などに参加して、進路意識を高めるとともに、各大学・短期大学で学べることや卒業後の進路について知る

ことで、自分の進路を広い視野から考え、2年生に進級する前に、希望進路に適した系列を選択できるようにしている。

2年次は、各系列の中で少人数のグループを作り、生徒自身がテーマを設定して探究学習を行う。その過程で、連携先の大学・短期大学の教員から指導を受けることも可能にした。生徒から「A大学のB先生にアドバイスを受けたい」といった要望を受けて、連携先と調整を図っている。

3年次には、生徒の希望進路により直結する活動を行う。例えば、アート・デザイン系では、倉敷芸術科学大学から、同校で行う卒業作品の制作・展示に関するアドバイスを受けたたり、こども保育系では、生徒が中国学園大学附属の認定こども園を訪問し、オリジナル劇を披露したりした。各大学が実施する高校生対象の講座の受講を推奨するほか、進学が決まった大学の科目を受講して単位の先取りを行う生徒もいる。

「将来の夢や志望が明確になれば、生徒はおのずと学びに向かいます。生徒の心に火をつけるのが、教師の仕事の1つです。高校3年間でできるだけ、生徒が学校外の人と触れ合い、活動して、刺激を得られるようにしています。大学や社会で経験を積むうちに、花開くものがあると期待しています」（浅井先生）

## 変革の成果・展望

### 子どもの成長を実感した保護者が、学校の応援団に

「倉敷クエスト」が始動して約3年。生徒は主体的に進路を考え、学習に取り組んでいる。「国公立大学の個別学力検査の対策をしてほしい」と、特進コースの生徒から声が上がったことをきっかけに、放課後補習で対策講座を実施。生徒は、友人と協力しながら難問に取り組んだ。商業科では、資格・検定試験を積極的に受験し、取得した資格を生かして国公立大学に合格する生徒が増えている。

授業計画を公表して教育の透明性を高めたことや、学校に満足している子どもの姿から、保護者の学校への信頼感も高まった。PTAが学校説明会に参加し、中学生の保護者に同校のよさを伝える姿が見られるようになった。

「倉敷で生まれ、育ち、学び、地域に貢献する人づくりをすることが、私たちの最大の目標です。本校ではそれを、『学びの地産地消』と呼んでいます。本校が地域の人々をつなぐ役割を果たしていきたいと考えています。これからも、倉敷という立地を生かして、学校の魅力を高めるためにできることを、生徒や保護者とともに追究していきます」（井上先生）